
バラの屋敷

海土龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バラの屋敷

【Zコード】

Z6337D

【作者名】

海士龍

【あらすじ】

それはバラの屋敷。魔女が住んでいる。　と、梨花は思つてい
る。人形師の青年と次々に消えていく少女たち。少女が少女でいら
れる時間の物語。

1・バラを盗む

二十歳になる前日、彼は言った。

もう一度と、ここに来てはいけないよ。

彼の言い分によると、私は年を取り過ぎたらしい。本当ならばもう少し早く言うべきことだったのだという。

翌日、彼の家は跡形もなく無くなっていた。

走っていた。ガチャガチャと、赤いランドセルの中で教科書と筆箱が大騒ぎを起こしていた。

手の中には赤いバラの花。茎はなく、頭をもぎ取るように花だけを引き千切つてある。

手のひらには無数の小さな傷。花を摘んだ時に、棘に引っ掻かれたのだ。

だけど、痛みを気にしている余裕はない。一刻も早く逃げなければならなかつた。

それはバラの屋敷。魔女が住んでいる。　と、梨花は思つている。

その家は古い造りで、まるで小屋のように小さく、二階がない。いわゆる平屋で、黒ずんだ木の壁にはぎつしりと薦がはつている。小さな窓は一つだけ、やはり薦で覆われていて、曇りガラスから覗ける家の中は不気味に暗い。

家に対して庭は広い。特に前庭には綺麗なバラが無秩序に咲き乱れている。

手入れをしているとは思えない庭だ。実際、梨花はその姿を見たことがなかつた。

眠り姫のお城のみたに、バラは小さな家を覆い隠している。家と庭を囲うように柵があつて、黒く錆びた鉄のそれにも薔が巻き付いている。

そのバラは柵からわずかはみ出すよつに咲いていた。

柵の中は魔女の結界がはつてある。だけど、柵からはみ出たその花には魔女の力は及んでいない。

そうと気付いた梨花は誘惑されるよつにそのバラに手を伸ばした。

ブツン。引き千切つた時、花が上げた悲鳴に梨花は身を竦めた。魔女が気付いてしまう。

小さな窓を見やつた。人影が過ぎつた気がして、梨花は慌てて駆けだした。

風。梨花の肩を押すよつな向かい風。魔女が梨花を家まで引き戻そうと魔法を使つてゐるのだ。そうとしか思えなかつた。

必死で逃げて、自分の家まで逃げ切ると、梨花は大急ぎで冷凍庫の扉を開いた。

バラの花を中に投げ込むと、音を立てて扉を閉める。息が切れていた。

恐ろしい魔女の顔が目の前に見えた気がして、ゾッとする。

魔女がバラを盗まれたことを忘れるまで、冷凍庫に隠していようと思つた。

凍らせてしまえば、バラも魔女に助けを求めることができないだろう。

だけど梨花は、綺麗なバラを見ることのできない矛盾に気が付いて重く息を吐いた。

綺麗だから欲しいと思つたのに、冷凍庫で凍らせていてはそれを眺めることができない。

それに魔女は執念深い。けして泥棒を忘れたりしないだろう。梨花を捕らえるまで追い続け、手酷い仕返しを考えることに楽しさを見出すに違ひない。

許して貰うにはどうしたらいいだろうか。逃げられないと悟つて
梨花は冷蔵庫の中からバラを取り出した。

魔女にも心はあるはずだ。梨花が心から謝れば許してくれるかも
しない。梨花はひんやりと冷えた花を両手で包むようにして、魔
女の家に引き返した。

魔女の家の門は梨花の胸くらいの高さがある。すっかり茨に覆わ
れていて、探すのに時間を有した。

押し開くと氣味の悪い音が響き、巻き付いていた薦がブツブツと
切れた。

きつと魔女はこの門からは出入りしないのだ。

梨花はそつと庭に足を踏み入れた。

カサリ、と足下で草が笑う。見下ろすと、伸びきった草花はあら
ゆる方角を向いていた。

スカートを引かれて振り向けば、バラの刺が引っかかっていた。
進路を塞ぐように生えた植木を押し退け、梨花は玄関へと進んだ。

「すみません」

インターフォンが見あたらず、扉を拳で叩いた。最初は遠慮がち
に恐る恐る。何度か叩いても返事がないので、最後には思い切り力
を込めていた。

ギイ、と扉が啼いて開く。魔女がついに姿を現した。

背の高い青年。年齢は分からない。初めは老人かと思つたくらい
真つ白い髪をしていた。

目は細く、横に切れついて、目尻に皺がないことから彼がまだ若
いのだと分かる。

スッと通つた鼻筋。薄い唇。絵本の中の魔女とはまるで違つ容姿
に、梨花は瞳を大きくした。

「何か？」

細い声。聞き逃してしまつところだった。

「バラの花を……」

梨花は手のひらを広げて、青年に花を見せた。彼は眉を寄せる。困惑した空気が伝わってきて、梨花は俯いた。

ふつ、と笑いが漏れる。驚いて見上げると、柔らかい笑みと目が合つた。

「それは君にあげるよ。　さあ、中に入つて。せつかく来たのだからお茶を飲んでいくといいよ」
なぜか断れなかつた。

2・笑わないモデル

バラの屋敷。 そう梨花が呼ぶ程その家は大きくはない。
だが、魔女が棲んでいると梨花が思い込んだくらいには、その家
は不思議だった。

家中に入ると、だだ広い部屋が広がっている。
天井まである大きな窓から差し込む光は、電気など必要ないほど
に明るい。

部屋のあちらこちらの壁に絵画が立て掛けられており、それらが
未完成であることは側に転がっている絵筆が物語っている。
中央にはベッドほどの大きさの白い台。 梨花と同じ年くらいの子
どもが服も着ずに座つていて、梨花はギョッとした。
だが、すぐにその子が生きていないと気がつく。 片足が無かつ
た。 それは作りかけの人形だったのだ。

梨花が部屋の様子に驚いている間に、青年は奥の部屋からティー
セットを運んできた。

そちらの部屋と手前の部屋の仕切りは白いカーテンのみで、どう
やらそちらの奥の部屋にはキッチンがあるようだ。

部屋はもう一つある。 白いカーテンの隣に焦げ茶色の木の扉がひ
つそりとあるのが見えた。

外観からは想像できない広さである。 やはり魔女の家なのだ、と
梨花は思った。

いや、魔法使いだ。

青年の出現によつて恐ろしい魔女の姿はすっかり払拭されてしま
つたが、魔法の存在は否定しきれずについた。

どう考へても、この部屋の広さはおかしい。 窓だけ、外から見
た時はこんなに大きくはなかつたはずだ。

テーブルがないので、彼はティーセットを白い台の上に乗せた。

それまでそこを占領していた人形を抱き上げて、壁際で息を潜めていた振り椅子に座らせた。

「そこに座つて」

指し示されたのは台の上。ティーセットの横だ。彼は梨花がそこに座つたのを確認すると、カップに紅茶を注いだ。

ティーセットを挟んで並ぶように彼も座る。

カップを差し出され、両手で包むように受け取ると、梨花は柔らかく伝わる暖かさを楽しんだ。

一口飲む。甘い香りが口の中に広がった。

「バラが好きなの?」

「綺麗なものが好きなの」

「僕もだよ」

「それなら、もっと手入れをしたら?」

「手入れ?」

「お庭のことよ」

無秩序に咲いている前庭のバラのことを言つと、彼は眉を寄せた。

「あれはあれでいいんだよ」

自分の意見を彼に押し付けるつもりはないので、梨花は口を閉ざした。

彼の庭だ。彼がいいのなら、いいのだろう。

紅茶を啜る。甘さが舌に染みた。

「君はバラ以外に何を綺麗だと感じるの?」

難しい質問だと、梨花は首を傾げた。それから、そうね、と言つて、部屋を見渡した。

大きな窓。そこから見える景色は、やはり荒れた庭。雑草としか言えない草花が自分のスペースを争うように生えている。

広いだけの飾り気のない部屋だ。物が少ない。だけど、それは梨花にとって好ましかつた。

「この部屋好きよ。窓から差し込む光が綺麗。物がゴチャゴチャしてなくていいわね。だけど、筆はちゃんと片付けた方がいいわ

よ

絵画の前に転がっている絵筆を指した。

「絵、見てもいい？」

彼が頷いたのを確認して、梨花は台から降りた。壁に立て掛けたある絵画に歩み寄り、しゃがむようにして眺めた。

子どもの絵。梨花と同じ年くらいの女の子が絵の中で生きていた。

別の絵では別の子が。だけど、全員女の子で、まるでそこにはいるかのように描かれていた。

「綺麗ね。でも、どの子もみんな笑っていないのね」

「笑つてくれなかつたからね」

「モデルがいるの？」

「いるよ」

「笑つてつて、頼めばよかつたのに」

「頼んだけど、聞いてくれなかつたんだ。僕の声が聞こえないらしくて」

「なぜ聞こえないの？」

そう尋ねてから、そうかと梨花は思つ。彼の澄んだ声は、気を付けていなければ聞き逃してしまいそうになるくらいに細い。音量が小さいというわけではなく、存在感が薄いのだ。耳が声として認識してくれず、空氣の音として扱つてしまふくらいの透明な声だ。

「私なら、あなたの声、聞こえるのにね」

「残念そうに言うと、彼は淡く微笑んだ。

「それなら君がモデルになつてくれるる？」

「いいわよ」

即答した。彼がそつと口にする前から、何となく、モデルを頼まれる予感がしていた。

3・消えた少女

「そろそろ時間だよ」

この家には時計がないのにどうして彼は時間が分かるのだろうと、梨花はよく思う。大きな窓からは変わらず白く明るい光が注ぎ込んでいる。

梨花は白い台から降りた。壁際に放ったランドセルを手に持つと、またね、と言つて玄関に向かつた。

玄関と言つても、歐米の家のように靴のまま部屋の中を歩き回る家なので、下駄箱なんてものはない。灰色のマットが床に敷いてあるだけ。

扉を引き開くと、いつも梨花は瞳を大きくする。外はとつぱりと暮れていた。

部屋の中を振り返る。窓から注がれている白い光。不思議に思いながらも、扉を閉めた。

夜道を駆けるようにして梨花は自宅に帰った。

彼と出会いつてから数ヶ月。毎日彼の家に通っている。

彼は梨花を白い台の上に座らせると、薄茶色の木のイーゼルを台の前に持つて来て、白いキャンバスをイーゼルに立て掛けた。

キャンバスの上を木炭が滑る。黒い細い線が幾重にも描かれた。油絵の具の匂いが部屋中に蔓延するようになつたのは、それからしばらく経つてから。

薄い青色が画面に広がっていく。それから、黄色。赤。

一枚目の絵が完成したのは、描き始めてから半年後のことだった。

絵の中で楽しげに笑う自分の姿を見て、梨花は満足そうに彼に振り返った。すると、彼は感慨深そうな表情をしていた。

「どうしたの？」

「絵の中の君が笑つてゐるから……」

「気に入らない？」

「そうではなくて、君がモデルなら、完璧な人形が作れるかも知れないと思つたんだ」

「完璧な人形？」

首を傾げると、彼は振り椅子を指差した。

片足のない人形。今にも泣きそうな顔でそこに座つていた。

「いいわよ。またモデルになつてあげても」

「本当に？」 だけど、人形を作るには絵を描くよりも時間がかかるんだ」

「構わないわ」

彼のこの家に通つことが楽しくなつていた。この部屋も居心地が良い。

むしろ、ここに居られる理由ができたことに、梨花は嬉しさを覚えた。

バラの薦に守られた家。ここは異空間だ。外の世界から隔離された空間。

外の世界では、数日前に梨花を不安にさせる事件が起きた。クラスメイトの女の子がいなくなつてしまつたのだ。

遊びに出掛けたきり、家に帰つてこなかつたといつ。

道ばたに置き去りにされた赤いランドセル。誘拐されたのだという話も出たが、犯人からのそれらしき要求はない。

まるで煙のように消えてしまった女の子。梨花も他のクラスメイトたちも皆、恐怖した。

だけど、ここは安全。ここは外の世界とは無関係な世界だからだ。

人形のモデルをすることになつた梨花は、彼の家に行くと、まず壁際にランドセルを置き、上着を脱いだ。下着姿になると、白い台の上に腰を降ろす。

それから、彼が運んできた紅茶とクッキーを口に入れながら、彼の作業を見守つた。

彼は白い大きな紙を床に広げ、梨花をスケッチし始めた。時折、梨花の腕や脚を取り、メジャーで長さを測る。そして、ブツブツと口の中で何かを呟きながら鉛筆を紙の上で滑らせた。

スケッチを終えると、次は白い粘土を運んで来て、梨花の見ている前でこね出した。

紙粘土だろうかと訊ねると、石粉粘土だといつ答えが返ってきた。違いが分からなかつたので、ふうん、と軽く鼻を鳴らした。

頭ができて、胴体ができて、脚ができた時、梨花は首を傾げた。作り始めてから一年が過ぎていた。

「本当に時間がかかるのね」

「君は動くからね。よく話すし、よく食べる」

「じつとしているつもりでいるんだけど?」

「君以外のモデルはもつとずっと静かだよ」

「少しも動かない?」

「少しもね」

梨花は毎日ここに来ている。いつたいいつの間に彼は梨花以外のモデルと会っているのだろう?

学校に行っている間に?

だけど、この部屋には梨花以外の誰かを描いた絵なんて一枚も置いていないし、人形だって、梨花をモデルにして作っている物と搖り椅子を占領している物だけだ。

腑に落ちない表情を浮かべていると、彼は薄く笑った。

4・人形の墓場

「君。 もしかして、腕、伸びた？」

できあがつた腕と梨花の腕を見比べて、彼は言った。

「腕だけが伸びたわけではないわ。足も伸びたわ。背が伸びたの」
ほら、と足を真っ直ぐに伸ばせてみせると、彼は眉間に皺を寄せた。

「顔付きも変わったみたいだ」

「そうかしら？」

ため息。

「最近、あの赤い鞄を持つてこないね」

「ランドセルのこと？」

「それにいつも同じ服を着ている」

「言わなかつたかしら？ 小学校は卒業したの。これは中学校の制服よ」

もう一度、ため息。

「作り直さないと」

彼は短すぎる腕を放ると、大きな白い紙を持ってきて、床に広げた。

「最初から？」

「そう、最初から。僕は君を作りたいんだ」

梨花は言葉なく頷いた。彼の思つままにさせてやろうと思つた。

翌日、梨花は近所の小学生がいなくなつたという話を学校の教室で聞いた。

以前の事件と同じように、赤いランドセルだけを置いて、女の子が消えてしまつたのだといつ。

怖い。

外の世界はなんて恐ろしいことが起きるのだろう。梨花はバラに守られた家に急いだ。

窓から注がれた白い光。外觀からは予想できない広い部屋。

そこはバラの屋敷。魔法に満ちている。と、梨花は安心していた。

ところが、その日、何気なく見やつた白いカーテンの脇で、梨花の視線は静止した。キッチンとの仕切りに使っているカーテンの脇に、扉がある。

この家に通い始めてから数年が経つが、その扉の奥の部屋には、入ったことが一度もなかつた。

その部屋の扉が薄く開いている。わずかな隙間から覗ける部屋の中は、暗い。黒魔術を使ったかのような濃い闇は、梨花をゾッときせ、梨花をその部屋から遠ざけた。

「あなた、知ってる？　また小学生の女の子が消えてしまったの」

更に半年の月日が流れ、梨花は試すように彼に尋ねた。

彼は小さく首を振る。

「さあね。興味がないよ、そんなこと」

「そう？」

カーテンの脇の扉に目を向ける。薄く開いている扉は、以前それに気付いた時よりも、もう少し大きく開いているように見えた。

「あの部屋には何があるの？」

「君はようやくあの部屋について聞いたね。　あの部屋にはね、

僕が閉じ込めておきたいと思うものを閉じ込めてあるんだよ」

「閉じ込めておきたい？　閉じ込めなければいけないようなもの？」

「逃げてしまふからね」

「生き物なの？」

低めた声で訊ねると、彼は目を逸らして何も答えなかつた。

それからしばらくして再び同様の事件が起きた。そしてその日も扉は薄く開いていた。

以前よりもほんの少し大きく開いている扉。梨花は恐る恐る歩み

寄つて、その隙間からそつと中を覗き込んだ。

暗闇。黒い絵の具を溶かしたかのように、部屋の中は真つ暗だつた。

だが、やがて闇に眼が慣れると、何かがそこにいるのが分かる。

人。いや、子どもだ。一人、二人、三人……。何十人もの子

どもが折り重なるようにその部屋の中に詰め込まれていた。

「これは何？」

青ざめて訊ねると、彼は薄く笑つた。

「よく見てごらんよ」

すうっと扉を開く。部屋の中に光が差し込み、その子どもたちが人形であることが分かつた。

キラリと輝いて見えたのは、確かに無機的な反射で、それはガラスの瞳。

梨花は両手を腰に当てた。

「こんな風に詰め込むなんて、この人形たちが可哀想だわ」
無造作に、まるでいらない物のように詰め込まれていた人形たち。ある人形は片腕がなく、ある人形は顔がなかつた。胴から下がないものや、逆に脚しかないものもある。

「だから、壊れてしまうのよ」

頬を膨らませて言うと、彼は首を横に振つた。

「違うよ。壊れたわけではないよ。元から、ないんだ」

「ない？」

「未完成だから」

梨花は怪訝な顔をする。

「どうして完成させないの？」

「途中で、違うと気が付くんだ」

「何が違うの？」

「僕が作りたいのは完璧な人形だ。作っている途中でその人形が完璧になり得ないことに気が付いてしまうんだよ」

グッと胸が締め付けられた。それではやはりこの人形たちは彼に

とつていらない物なのだ。

「以前、あなたが作っていた私の人形のパーツもこの部屋の中にあります？」

梨花が成長する度に、彼は梨花の手足を測り直し、人形の手足を新たに作り直していた。

「まるで、この部屋は人形の墓場ね」

最後に一瞥して梨花は部屋の扉を閉めた。ちらりと視界の端に、小学校の時にクラスメイトだった女の子によく似た人形が見えたような気がした。

5・完璧な人形

梨花が指先でクッキーを摘み上げた時、彼はようやく気が付いて、眉を寄せた。

「君、いつもと違う服を着ているね」

「中学校は卒業したの。これは高校の制服なのよ

「体付きが変わったね。丸みが出てきた」

「でもね、胸はちつとも大きくならないのよ」

同級生たちの女らしさを口に出すと、彼は顔をあからさまに顰めた。

「そんな風にならなくともいいよ。胸なんか大きくなくていいし、化粧なんかしなくていい」

「そんなことを言つても、胸はともかく、お化粧はしなければならない時が来るわ」

「ああ、そうだね。君は成長するからね」

ついと顔を背けると、それっきり彼は無口になってしまった。

その日、また一人、小学生の女の子が消えた。

「最近、あの人の形を見かけないんだけど?」

ずっと振り椅子を占領していた片足の人形が見あたらない。その代わり、別の人形が振り椅子に腰を降ろしていた。

「あの人形はあの部屋だよ」

指示されたのは例の部屋。梨花はちらりと目を向けて、気を滅入らせた。

代わりに座っている人形は、髪をお下げにした可愛らしい女の子で、片足がなかつた。

「この人形も片足がないの?」

「ないからそこに座っているんだよ」

「どういう意味?」

梨花は首を傾げた。彼は微笑む。

「足がなければ逃げられないだろう?」

「足があつても人形は逃げないわ。 それに、あなた。 いつたい

いつの間にこの人形を作ったの? 私の人形はちつとも完成しない

のに」

梨花は、自分をモ^デルにしている人形以外の人形を制作している彼の姿を見たことがなかつた。

これまでの付き合いで、彼の人形制作には途轍もなく時間を必要とすることもよく知つていた。

だからこそ、いつたい一つの間に、と思うのだ。

「久しぶりに良い出来だけど、やっぱりその子も完璧ではないんだ」

残念そうに言つた彼と揺り椅子の人形を見比べる。人形は今にも泣き出しそうな表情をしていた。

「どうしてこの人形はこんなにも悲しそうな顔をしているの?」

「僕のことが嫌いなんだ」

「嫌い? なぜ?」

「嫌われるようなことをしたからかな?」

梨花は彼の手の中にある人形を見やつた。梨花をモ^デルに作つている人形。

今のことろその人形は仄かな笑みを浮かべている。

「私の人形もあの部屋に入れる?」

「たぶん君のは大丈夫だ」

「ちゃんと両足を作つてくれる?」

「その前に、他のパーツをちゃんと作らないと」

彼はメジャーを取り出した。新しい白い紙を床に広げる。また最初から作り直すつもりなのだろう。

梨花は18歳になると、背も伸びなくなり、一時期太つた身体もスマートになつた。

そして、その時が最後の測定となつた。

最後に測定をした日から、更に一年の月日が過ぎて、彼は作り上

げた人形のパーツそれに肌色を塗り始めていた。

この日もモデルをするために、梨花は下着姿で白い台の上に乗つた。胡座をかくと、指を組んで頭の上に持つていく。そして、上へ上へと体を伸ばした。

幼い頃は広いと思った台も、今ではそれほどでもない。部屋は相変わらずだだ広く、生活感のない様子だけど、この十数年で増えた絵画があちらこちらに転がっている。

彼は梨花の成長に気付く度に、梨花を描いた。

人形に比べて、絵の方にはそれなりに自信があるらしく、時間も掛からなかつたし、人形の墓場のような部屋は絵画にはなかつた。

それに、絵の中の梨花は常に柔らかく微笑んでいる。

人形の唇に朱が入れられる。その様子を眺めていた梨花はハツとする。人形が笑つていない。

自分そつくりの人形の顔。冷たく無表情に天井を見上げている。彼は絵筆を止め、梨花に振り返つた。

「君も僕のこと嫌いになつた？」

「そんなことないわ」

「以前みたいに笑わなくなつたね」

「笑つているわよ？」

「確かに笑つているね。」

「違うつて？」

「彼は押し黙つた。そして、零すように言葉を口にする。

「君はもう子どもではいられないんだね」

6・時は少女を連れて

もうすぐ完成するんだ、と彼が言つたのは昨日のこと。
梨花はヒールの高いブーツをカツカツ鳴らせて、バラの屋敷に向かっていた。

外観は小屋のように小さなその家は、中に入ると屋敷と言つても相応しいだけの広さがあることが分かる。

ただし、部屋数は少ない。彼の制作部屋と人形の墓場、そして、キッチャンだ。

ベッドのような台が制作部屋の中央に置いてあって、壁際には何枚もの絵画。後はガランと何もない。

タンスとか本棚とか、豊かに生活するために必要な物が一切なかった。

そう言えば、彼はいつも黒い服を着ている。壁も床に白いこの部屋に、彼だけが黒く、異質だ。

けれど、彼は魔法使いなのだから、それも不思議ではない。と、梨花は思つてゐる。

梨花は彼の家の前まで来ると、薦の這つた門を押し開いた。十数年も踏みならしたおかげで門から玄関までの前庭には道ができる。

扉も前ほど大きな悲鳴を上げたりはしない。静かな音で開くと、梨花は部屋の中を覗き込んだ。

白い空間の中、黒はすぐに目に入つてくる。彼が中央の台の上に身を屈めていた。

彼の身体の下には少女。台の上に仰向けて横たわつてゐる。

梨花はハッと息を呑み込んだ。彼の唇は少女のそれと重なつていた。

身動きが取れなくなる。呼吸を忘れるほどの衝撃を受けて、梨花はその場に座り込んだ。

彼が振り返った。

どうして？

得体の知れない感情が胸をざわつかせた。ゆっくりと彼が歩み寄つてくる。

「気持ち悪い？」

静かな問いに返すべき言葉が出ない。

気持ちが悪いと、彼に対しても思つてゐるのかもしねない。

そして同時に、裏切られた、と。

差し出された手に捕まつて立ち上ると、梨花は台の方へと目を向けた。

そこに横たわる少女は、梨花の出現にも関わらず、ピクリとも動かない。それもそのはず。彼女は梨花をモデルに彼が作った人形だからだ。

「どうしてあんなことをしたの？」

台に近寄ると、人形を見下ろした。眼を見開いた顔は無表情。長い髪は扇状に広がり、布をまつたく身に着けていない肢体をわずかばかり隠している。

「君が好きなんだ」

「でも、人形は何も答えてくれないわよ？」

「それでいいんだよ」

「本当に？」なぜ？」

彼の作った人形は瞬きさえしない。唇を動かすことも、言葉を発することもできない。

「私もあなたが好きなのに？」

自分なら彼の想いに応えてあげられるのに。微笑んであげることも、愛を語ることもできるのに。

彼はゆっくりと頭を左右に振った。

「だけど、君は老いていくから」

ぐつと、息が詰まつた。心臓を轟掴みにされたようだつた。

「人形が完成したから、私はいらない？」

「君は大きくなりすぎた。もう少し早く別れを告げるべきだった。

だけど、僕は少しでも君を見つめていたかつたんだ」

「あなた、自分がすごく勝手なことを言つていいって、自覚ある？」

「仕方がないんだ」

彼はちらりと奥の部屋を見やつた。無意識なのだろうが、その視線の動きは梨花を途轍もなく不安にさせた。

「生きている君が好きだ。キラキラと眩しくて。初めて君がこの家に来た時、なんて綺麗な心を持った少女だろうと思ったよ」許可無く摘んでしまったバラの花を両手に包み、謝るために玄関の扉を叩いたあの幼い日のことだ。

「一瞬で君に心を奪われた。君が欲しくて堪らなくなつた。君を君の家に帰す度に、胸が痛んだよ。ずっと君をこの家に留めることができたらいいと思った。だけど、君との時間はあまりにも心地良くて、その時間を止めたくはなかつたんだ」

「だから、お別れするの？」

「君にはこれからも時間を刻み続けて欲しい。もう一度と、ここに来てはいけないよ。君の代わりにこの人形を連れて、僕は行くから」

そう言つと、彼は台の上に横たわる人形を抱き上げ、梨花に背を向けた。

風もない。誰の手もないのに、奥の部屋の扉が小さな響きを立てて開いた。

その部屋の中は相変わらず暗い。彼は闇に吸い込まれるように部屋の中へと姿を消した。

追いかけようと梨花が一步踏み出した時、バタン、と扉が閉まつた。慌てて駆け寄つたが、もはや押しても引いても扉はわずかにも動かなかつた。

翌日、いつものように彼の家に足を向けた梨花は、何もない土地

を田にする。

跡形もない。家が建っていたという痕跡すらない。あれだけ咲き乱れていたバラもなく、雑草さえも生えてなかつた。

赤らんだ土が剥き出しになつた土地。梨花はしばらく立ち廻しつた。

バラの屋敷。

その家と共に、彼が姿を消したその時から、女の子が消えるという事件も久しく耳にすることがなくなつた。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6337d/>

バラの屋敷

2010年10月8日14時36分発行